Vol.2017-DC-106 No.2
2017/10/4

清代説文校勘の「宋本」言及箇所のデータベース化

鈴木 俊哉
suzuki toshiya
〒739-8511 広島県東広島市鏡山 1-4-2　広島大学　総合科学研究科
mpsuzuki@hiroshima-u.ac.jp

概要: 説文小篆の ISO 文字符号化の審議材料として、説文解字の版本比較を行っている。こんにちの版本評価には清代の説文学の影響が無視できないが、清代の判断材料となった宋本は現在では確認が困難なものが少なくない。そこで、いくつかの清代な校勘研究に見える「宋本」の状況を採集し、現存する宋本および清代の翻刻本と比較するデータベースが必要と思われる。現在、代表的な資料として静嘉堂本、平津館本、藤花榭本と、段玉裁『汲古閣説文訂』また嚴可均『説文校議』の言及箇所を突き合わせているが、そこで得られた知見を報告する。

1. はじめに

既報のように[1]、ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 において ISO/IEC 10646 文字符号規格に『説文解字』[2](以下、説文)の見出し字、いわゆる説文小篆を現代漢字とは別の書字体系として追加しようという動きが進んでいる[3][4][4][6]。

説文は、漢代の許慎が秦代の正字であったとされる小篆をもとに、字形を分解して字義や字音を解釈する考え方や、「部首」の考え方の骨格を定めた字書である。秦が滅んで 300 年経ってから編まれた時代的な制約があり、こんにち得られるような秦以前の文字資料を踏まえると、説文が記す字形・字義解釈は必ずしも全て正しいとは限らない[1]。しかし、甲骨文字が清末に発見されるまでの長い期間、漢字の成り立ちを説明する最も権威ある資料であった影響は大きい。現在でも、多くの字書で「古字」「本字」などと言った場合、それは最新の古漢字研究に由来するのではなく[2]、伝統的な、説文から康熙字典に至る流れから来ることが多い。

1.1 説文小篆字形の正確性と権威性の違い

説文は唐代以降正字政策の根拠に利用されたが、楷書の正字形を定める根拠としての参照であった。そのため、説文という字書が広く通行していたかは疑問があり[3]、許慎原本の全体像がうかがえる資料は未発見である。従って、現在では、許慎から 900 年近く下った、北宋初期に徐鉉が校訂した説文(いわゆる大徐本)によって説文小篆を字形を議論することが一般的である。この大徐本はいくつかの宋版本が知られる。ただし、明末清初にかけて再発見された当初は北宋本として珍重されたものの[4]、現在ではより時代が下った南宋元修本と見られることが多い[9]。宋初の徐鉉校訂の段階で資料は既にかなり混乱や脱落があったと思われ、大徐本の説解でもあちこちに「闕」の語が見える[5]。

以上のように、説文解字は、非常に権威性がある資料であると同時に、その権威性は歴史的経緯による部分が大きく、内容の完全性や正確性に依るわけではないので、その内容を最新の古漢字研究によって「正しい小篆」に修正することは難しい。現在では、別の字形のほうが広く流通していたことが知られるものや、広く通行していたが説文に採られていない文字もあるが、それによって説文を改めることはもはや望ましくない状況と言って良いであろう。

2. 説文小篆の ISO/IEC 10646 化と版本評価問題

説文小篆には上で述べたような背景があるため、ISO/IEC 10646 で例示字形を示すために、どの版本の字形を参照するのが良いか判断が難しい。2003 年の最初の提案においては[3][4]、様々な版本(大徐本、小徐本、唐寫本木部残巻などの他、校訂研究として段注本[10]、桂馥『説文解字義証』なども含む)を収集した統合文字表を作り、そこから標準化する文字を選定するというロードマップが考えられていた。しかし、2014 年にはこの計画を縮小し、藤花榭本[11]を主軸として陳昌治本[2]・段注本の 2 本を加えて統合文字表を作成する計画になった[4]。2015 年にはさらに縮小され、藤花榭本だけということになった[6]。ここまで縮小すれば、当然のことながら「藤花榭本が最善かどうか、他の版本はどうすればよいのか」が問題となる。

2.1 台湾・中国の 2014 年以降の動き

2014 年に藤花榭本・陳昌治本・段注本を選んだ際の版本評価は、以下のような組み立てであった[4]。

- 現在完本としてあるのは宋本およびその翻刻であるので、この系列を用いる。
  - 唐寫本木部残巻のようなものは宋本より古い形を残すが完本ではないので使えない。
- 宋本の翻刻として、藤花榭本(以下、額本)、平津館本[12](以下、孫本)、陳昌治本(以下、陳本)がある。
  - 陳本は孫本に基づき、直接に宋本に依らない。
  - 孫本は校改があるので、できるだけ元の形を残すには額本が良い[6]。

---

[1] 文字学的に正しい字形を議論しないとしても、歴史文字資料に見える字形が説文だけ異なる現象は[7][8]などが指摘している。
[2] 実際の古漢字の用例が少ないために学説自体も常に見直しが加えられることが多い、という点も注意が必要である。
[3] 小篆を例示字形にしたと思われる字書には説文のほか『字林』などがあり、宋以前の音義書などでよく参照される。また、説文や字林は官僚登用試験などにも用いられたと言われる。しかし、敦煌文書などに木版印刷以前の韻書や字書の断片が多く見えるのに、説文や字林の断片は見つかっていないことから、小篆を実際に書いた字書類の流通は限定的なものであったように思われる。
[4] たとえば汲古閣本[28]は「北宋本校刊説文真本」と封面に記す。王昶旧蔵本の四部叢刊影印本[16]も出版時には北宋本とされていた。
[5] 有名な例としては「邉」などの正字形に用いられる「㬎」に関して、説文と独立にこのように書いた例が殆ど見当たらず、小篆字形がなぜこのように書かれるかの説明は説文でも「闕」となっている(巻 04 上「自」部参照)。文献[8]などを参照されたい。
[6] 文献[4]の p.2 に"Both Tenghuaxie version and Pingjinguan version were made following original Song Dynasty printed books, while Pingjinguan version was revised. To retain the original contents as much as possible, Tenghuaxie version was selected first when the proposal was drafted."とある。

ⓒ 2017 Information Processing Society of Japan

この「孫本には挍改がある」という評価は、古くは王筠『説文解字句讀』[13]や丁福保『説文解字詁林』[14]の序文に見え、日本でも福田襄之介『中国字書史の研究』[15]などがこれに従った見方をとる。しかし、これらの評価は主に王昶・陸心源旧蔵本[16](以下、王本)との比較に基づいたものであり、古くから周祖謨[17]や倉田淳之助[18]によって「孫本の底本は王本と別本なのであって、孫星衍が翻刻する際に挍改した結果とは言えないのではないか」という指摘が出されていた。

また同時に、額本も王本とよく一致すると確かめられているわけではない。額本の底本はもともと王本ではないと考えられていたために、そもそも差異についてあまり調査されなかったと思われる。額本の底本と考えられてきたのは海源閣旧蔵・現北京国家図書館所蔵の、いわゆる丁晏跋本[19](以下、海源閣本)であるが、この 2 つの関係については王貴元氏が 1999 年に以下の指摘を行っている[9]。

- 額本はその序文で鮑漱芳所蔵本に基づくと書いているが、海源閣本には額勒布の印記はあっても鮑漱芳の印記はない。
- 額本と海源閣本を比較すると違いが多い。

王貴元氏はこのことから額本の底本は海源閣本ではない、と判断している。筆者は王貴元氏の論文を 2015 年に参照し、藤花榭本が宋本に最も近いという判断に疑問があること、また、各版本の違いを無視できないとするのであれば Variation Selector を使ったほうが良いのではないかと提案した[20]。これに対する応答は、以下の 2 点であった[21]。

- (現存する)宋本はカスレや破れ、また、補写があり、そこからそのまま規格票字形を作成するのに適さない。
- 平津館本は藤花榭本より刷りが悪い。

前者は頷けるところもあるが、後者については対比されているのが ctext.org にアップロードされている低解像度のスキャンデータであり[7]、基準を揃えた評価とは言い難い。

2.2 版本評価の検証と孫本の底本問題

この指摘と平行して、筆者は孫・王本に差異を調べた様々な先行研究の指摘箇所で、額本ではどうなっているかを調査した[22]。その結果、全体でこの 3 本に違いがある箇所は少なくとも 373 箇所以上あり、孫本が王本と異なる箇所で、孫本は額本に一致する状況が少なくないという結果を得た。従って、周・倉田の指摘は統計的にも支持され、当初の「孫本は宋本を挍改しているので、挍改していない額本より劣る」という評価は、少なくとも前提に問題があることがわかる。さらに、孫本・王本が一致するのに額本だけが異なる場合もあり、それらの箇所では孫本・王本が誤っていて額本が正しいことから、額本は何等かの修正を受けている可能性も示唆された。

さて、孫本の底本が王本ではないとしても、具体的にどういう資料であったのかは未解明の問題である。先行研究の検証の中で得られた手掛かりとして、鈕樹玉『説文解字校録』[23]の附録「説文刊誤」に見える状況は、『校録』本編で言及される宋本とは異なっており、孫本に近いことを報告した。孫本を準備する際、当初、孫星衍は鈕樹玉、姚文田、嚴可均、錢坫らに校勘を依頼したが、最終的には、顧廣圻の助言を受け、これらの校勘を加えずに底本の誤りをそのまま刻すという方針をとった[8]。この経緯から、鈕樹玉は孫本の資料となったものを見た可能性がある。

これを踏まえると、孫星衍が校勘を依頼した他の研究者の著作から資料の痕跡を探すことにも意味があるだろう。周祖謨はこの問題について

至於鈕氏説文校録所云宋本與嚴章福説文校議議所云宋本、皆與王氏宋本相近。嚴可均説文校議云宋本、即孫氏所遽之本、而兼襲汲古閣説文訂之説。鮑本則介於毛本王本之間、然亦有與孫本同者。蓋彼等皆未述及所見宋刻之版式及其内容、故頗難断定其所也。[17]

と述べており、姚文田・嚴可均『説文校議』[24](以下、校議)には孫本に似た宋本が言及されることを記す。また、嚴可均は、孫本の刊行に際して、大幅な校勘を主張したが入れられず、後の著作にしばしば刊行された孫本への不満を述べていることもあり、かなり詳しく見ていたことが期待されるので、本稿ではこれを調査する。

3. 『説文校議』所引「宋本」のデータベース化

『校議』には、約 300 箇所で「宋本」の語が見える。また、数はそれほど多くないが、「宋本…一宋本…」という形式で複数の宋本について記す場合もある。この言及箇所を孫・王・額本、および、汲古閣四次様本[29]・通行本[28]と比較した。『校議』は汲古閣初印本[9]を校訂して大徐の失を正そうというものだが、『校議』の言う初印本とは実際に初印本を確認した結果を書いているかには疑問があり[10]、この第五次修改の問題を明らかにした段玉裁『汲古閣説文訂』[30](以下、説文訂)の指摘から逆算した可能性があることには若干注意が必要である。本稿では紙幅の制限のため、文献[22]で収集されておらず、また孫・王・額本間に差がある 61 項に絞り、表 1 に示した[11]。

3.1 『校議』での「宋本」言及の傾向の解釈

『校議』が「宋本」に言及する 297 箇所の状況を調査すると、その大半 182 箇所では、孫・王・額本で差がない(表 1 からは略している)。版本間に違いがある場合、孫本としか一致しない状況が最も多いことから、周祖謨が指摘したように、『校議』が参照した宋本の、少なくとも 1 つは、孫本に近いとは言える。また、黄(7)のように孫本と一致しないものも見つかっており(全体の 297 箇所のなかでは 9 箇所を数えた)、刊行済みの孫本ではないことも言える。

前述のように、この 3 本で差がある箇所は少なくとも 373 箇所あり、孫・王本に限定しても 280 箇所以上で異なる。それらの殆どが言及されていないことを単純に考えれば、『校

[7] 文献[21]の fig. 3 参照。
[8] 孫本[12]の序文の他、姚文田・嚴可均『説文校議』[24]後敘、嚴可均「對孫氏問」[25]、顧廣圻『説文辨疑』[26]序文に見える。
[9] 段玉裁が『汲古閣説文訂』を表すにあたり、汲古閣通行本に至る直前の校本を確認し、通行本は最後の挍改で非常に大きく改めていることを明らかにした。段氏が参照した校本は後に淮南書局が翻刻した四次様本なのだが、段氏は著作中でこれを初印本、未改本などとも呼ぶ。第 1 版～第 5 版のような関係ではないことには注意が必要である[31][32]。
[10] 嚴可均の弟の嚴章福による『説文校議議』でも嚴章福が参照した初印本とは合わないことが書かれる。
[11] 全体を含む論文については投稿中である。

議』が参照した宋本群は孫・王本のような関係ではなく、海源閣本・内藤湖南旧蔵残本[18]・雙鑑樓旧蔵残本[17]のように相互に似通ったものだった、ということになる。しかし、指摘内容を細かく見ていくと、孫・王本の差に注目した先行研究と、『校議』では、校勘の観点が違う可能性がうかがえる。最も大きな違いは、孫・王本の差に注目した校勘では反切用字の違いが 100 箇所以上指摘される一方、『校議』では「宋本」に言及する箇所で、反切用字の違いに言及した箇所は 1 つもない。従って、『校議』は、「宋本」と汲古閣本の反切用字に違いがあっても記録しなかったと推定される。これは『校議』が大徐本ではなく許慎原本に戻そうとしている動機と関係すると思われる(許慎原本には反切はなく、大徐本の反切は徐鉉が「唐韻」から取り入れたと考えられている)。その一方、小篆字形の違いに関しては孫・王本の比較研究で指摘されていないようなものも見つけられている。陣(57)、𩫖(58)のように微細な字形差に注目したものもあるが、皷(28)のように明らかに無視できない違いもあり、孫・王本の対比研究に比べて粗漏なために重ならなかったとは考え難く、校勘の方針の違いと考えるのが妥当であろう。

3.2 『校議』での「宋本」言及箇所での額本の状況

表 1 を精査すると、孫・王本には差がないが、額本は異なっており、その状況は汲古閣本に符合するものも少なくない。このことは、先の調査で「孫・王本は誤るが、額本は正しい」状況について、汲古閣本に基づいた校改が加えられていた可能性を示唆している。特に、『校議』の指摘箇所での「宋本は正しいが、汲古閣本が誤る」状況において、孫・王本が正しく、額本は汲古閣本の如く誤る事例(たとえば𨸏(10)、毅(15)、𩫖(16)、鄤(24)、寘(25)など)があることは、額本を「正しい状態を額勒布が独自に考えて校改したが、結果的に汲古閣本に符合した」と解釈するのでは説明できないことには注意が必要である。

4. まとめ

本稿では、平津館本説文解字の成立過程の痕跡を関係者の著作から探す調査の一環として、姚文田・嚴可均の『説文校議』に見える「宋本」について調査した。その結果、『校議』に見える「宋本」は、孫本・王本・額本の中では孫本に近いが、刊行済みの孫本ではないという、周祖謨の評価を支持する結果を得た。しかし、おそらく『校議』の校勘方針のため、孫・王・額本の差異が見える箇所の多くについては状況が記録されておらず、参照した複数の「宋本」の性格を全て明らかにすることはできなかった。

今回の例に見られるように、特に甲骨文字発見以前の説文校勘研究は、宋本よりさらに古い「あるべき姿」に復元しようとする場合があり、純粋に書誌学的な研究であれば採取する筈の情報が落ちている可能性がある。校勘の方針のために情報が全て書き出されていない事例としては、『説文訂』も同様の性格を持つことが思い出される。『説文訂』は全体で汲古閣通行本に対して 317 箇所の指摘をしているが、その中で汲古閣初印本に言及するものは 142 箇所と半分以下である[32](文献[29]の巻末付録の、張行孚の四次様本校勘記では通行本との差は 255 箇所書き出されている)。宋本に言及するものも 255 箇所で、全ての箇所ではなく、必ずしも汲古閣通行本以前の大徐本の様子を全ての項目で書き出しているわけではない。したがって、各校勘研究に閉じた形で「宋本」の言及箇所のみを収集して、それらの重なりを見たとしても、ある校勘研究と別の校勘研究が同じ「宋本」を見ているのか、別本なのかの判断は誤ってしまう可能性がある。この問題に対応するためには、「ある説文校勘研究での宋本の言及箇所を、別の校勘研究では(宋本に言及していないが)どう扱っているか」を含めてデータベース化することが必要であろう。

また、『校議』の宋本言及箇所を調べるということは、本来、孫・王・額本を比較することとは独立であった。なぜなら、この中で実際の宋本は王本だけであり、『校議』編纂においても王本(またはそれに類する資料)を見たとしないと説明できない箇所はそれほど多くないからである(全て先行研究で指摘済のため、表 1 には含めていないが、297 箇所中 4 箇所を数えた)。しかし、『校議』の宋本言及箇所について孫・王・額本の状況を調べると、小篆その他について、孫・王本が異なるのに、孫・王本の差異を洗い出すことを目的とした先行研究でも言及されていないものも多数見つかった。さらに、汲古閣本を含めてデータベース化することによって、本来は予定していなかった額本の校改に関する傾向を知ることができた。このことから、汲古閣通行本に対する校勘を行った鈕樹玉『説文解字校録』や、錢坫『説文斠詮』の「宋本」の記録についても、データベース化によって新たな知見が得られる可能性があるだろう。

4.1 本稿執筆中の標準化動向

本稿執筆中に、説文小篆の ISO 10646 採録を目指すアドホック会議が台北で開催された[33][34][35]。そこでも版本評価が問題となったが、台湾の専門家の説明は観点が変更され、陳本の字形は画線の太さが一定でないこと、縦横比が小篆で望ましいとされる 5:4 でないこと、周囲に空間を残して字形を中心に寄せて書くなどの特徴があるため、視認性が劣り、これらの問題が少ない額本が適切だという、タイポグラフィ的な観点の評価に変更した。また一方、中国の専門家は[12]、孫本は底本の誤りをそのまま刻しているが、額本は誤りを校正した上で刻しているため、額本の方が良いという評価を説明した。

これまでの評価基準との整合の問題はあるが、上記の説明は首尾一貫したものになったと言える。『校議』指摘箇所で見る限り、額本の校改は必ずしも優劣の観点で孫本より良くなっているわけではなく、単に汲古閣本に近づいている箇所があるというのが実情に近いと思われる。そのため、これらの文献内容に踏み込まず、タイポグラフィ的な評価基準を定めて選定した台湾の動きは、客観的な判断を可能にしたものと評価できる。

謝辞

本研究は科研費課題番号 26330377, 16K004600 の補助を受けました。

[12] この会議では北京師範大学文学院の王立軍教授が以下の説明を行ったが(説明資料は本稿執筆時点では ISO 未提出)、直後に ISO に提出された文書[35]では藤花榭本への言及はほとんどなく、むしろ陳昌治本と平津館本について議論している。

参考文献

[1] 鈴木俊哉: “説文小篆の符号化計画に対する Variation Selector 提案とその反応”, 情処研報, 2016-DC-102(6),1-6 (2016-07-08) , 2188-8892
[2] 許慎: 『説文解字』, 中華書局 (1963.12), ISBN 7101002609.
[3] China: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG N1119, “Old Hanzi Samples from PRC”, 2005-05-18.
[4] China: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG N1139, “References on Old Hanzi”, 2005-05-25.
[5] TCA and China: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4634, “Proposal to encode Small Seal Script in UCS”, 2014-09-30.
[6] TCA and China: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4688, “Proposal to encode Small Seal Script in UCS”, 2015-10-20.
[7] 江守賢治: 『解説字体辞典』(1986) 三省堂 ISBN 4385150346
[8] 大熊肇: 『文字の骨組み—字体/甲骨文から常用漢字まで』(2009) 978-4434130915
[9] 王貴元: 「《説文解字》版本考述」, 古籍整理研究学刊 (1999 年 第 6 期), p.41-43, p.34
[10] 段玉裁: 『説文解字注』, 経韵楼(1815)
[11] 許慎: 『仿宋小字本説文解字』(藤花榭本説文解字), 額勒布, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00025/index.html (2017 年 8 月閲覧)
[12] 許慎: 『嘉慶甲子歳仿宋刊本 説文解字』(平津館本説文解字), 筆者が参照したのは国立公文書館所蔵、漢 3184, 第 48 冊, 函号 371-43
[13] 王筠: 『説文解字句讀』, 涵芬樓, 出版年不明(清末民初).
[14] 丁福保: 『説文解字詁林』, 臺灣商務印書館影印 (1976).
[15] 福田襄之介: 『中国字書史の研究』, 明治書院（1979）p.182-187.
[16] 許慎: 『説文解字』, 四部叢刊所収, 上海涵芬樓借日本岩崎氏静嘉堂蔵北宋刊本影印, 商務印書館 (1919).
[17] 周祖謨: 『問学集』, 中華書局 (1966-01), 下巻, p.760-800.
[18] 倉田淳之助:「説文展觀餘錄」 東方学報(京都) 第 10 冊第 1 分冊 (1939), p.145-154.
[19] 許慎: 『説文解字』, 中華再造善本, 中國國家圖書館藏宋刻元修本影印, 北京圖書出版社 (2004-03), ISBN 7501322627
[20] suzuki toshiya: “Proposal to Apply Source-Based Variation Selector in Shuowen Small Seal Encoding”, ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2 N4716, 2016-04-28.
[21] TCA: “TCA Feedback on N4716”, ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2 N4755, 2016-09-22.
[22] 鈴木俊哉: 「清刊大徐本説文解字の版本評価の再検討に向けて」, 環境科学研究 11 (2016), p.77-100, http://doi.org/10.15027/42559
[23] 鈕樹玉: 『説文解字校録』, 江蘇書局 (1806)
[24] 姚文田、嚴可均: 『説文校議』, 續修四庫全書 (2002), 經部小學類, 第 213 冊
[25] 嚴可均: 「對孫氏問」, 心矩齋叢書所収『鉄橋漫稿』(光緒 11, 1885), 巻 4, 葉 5-9.
[26] 顧廣圻: 『説文辨疑』, 續修四庫全書 (2002), 經部小學類, 第 215 冊
[27] 許慎: 『仿宋小字本説文解字』(藤花榭本説文解字), 額勒布, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00025/index.html (2017 年 8 月閲覧)
[28] 許慎: 『北宋本挍刊汲古閣藏版説文真本』, 汲古閣, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00023/index.html (2017 年 8 月閲覧) http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A020menu.html (2017 年 8 月閲覧)
[29] 許慎: 『説文真本光緒七年八月淮南書局翻刊汲古閣弟四次様本』, http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A024menu.html (2017 年 8 月閲覧)
[30] 段玉裁: 『汲古閣説文訂』, 五硯楼 (1797).
[31] 高橋由利子: 「『説文解字』毛氏汲古閣本について」, 汲古, 第 27 号 (1995), p.27-38
[32] 高橋由利子: 「段玉裁の『汲古閣説文訂』について」, 中国文化 (55), 1997-06, p.37-52
[33] suzuki toshiya, Richard Cook: “Shuowen Seal Encoding Design Issues”, ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4834
[34] “Logistics Information and Draft Agenda for ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG 2 Small Seal Script Ad Hoc Meeting”, ISO/IEC JTC 1/SC 2/WG2 N4835.
[35] Chinese Character Database Program: “Comments on Encoding of Small Seal Script Characters”, ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4855.
[36] ISO/IEC JTC1/SC2: “Ideographic Description Characters”, Information Technology – Universal Coded Character Set (UCS): 2014-09-01, Annex I, p.2423-2426.

表 1 『校議』に見える「宋本」と汲古閣本および宋刊・清刊大徐本との比較

『校議』に見える「宋本」と汲古閣本および小字本の状況と、『校議』の校語を以下に示す。各カラムは以下のようである。正文数、重文数などに関しては算用数字で置き換えて表記している。文字があるべきところが空白になっている場合は「( )」のように書き、その箇所が詰められていて空白もない場合は(欠)と書く。ISO/IEC 10646 に含まれない漢字に関してはできるだけ IDS[36]で表記したが、小篆字形および字形が複雑なもの、判読が難しいものに関しては画像で示す。オレンジで塗ったものは孫・王本に差があり、先行研究で言及されているべきところが本稿の調査で新たに見つかったものである。

巻: 大徐本で親字が収録される大徐本の巻号。巻 1 上を 01a、巻 2 下を 02b のように書く。標目巻は 00x とした。

『校議』が記す「宋本」の情報: 『校議』の校語から宋本に関わる部分を抽出した。また、何と対比しているのか明らかでない部分については適宜括弧でくくり補足を加えている。また、校語の内部で小篆字形を問題にする場合は画像を貼り付けている。基本的には續修四庫全書の画像を示すが、読み取り難い場合は廣文書局版の画像をさらに括弧つきで追加した。

淮: 淮南書局による汲古閣四次様本の翻刻。京大所蔵本での状況。

毛: 汲古閣通行本(五次修訂後)。早稲田大学古典籍データベースでの状況。

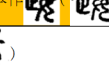
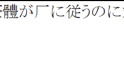
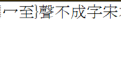
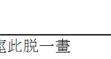
孫: 平津館叢書本、五松書屋本。国立公文書館所蔵本での状況。

王: 王昶旧蔵本、四部叢刊影印本での状況。

額: 藤花榭本。早稲田大学古典籍データベースでの状況。

『校議』に符合するもの: 『校議』が記す宋本の状況に符合する小字本を列挙した。「無」は、符合するものがないことを示す。『校議』が引く宋本の数を明示するために括弧で括っている。「(孫,王),(額)」のような表記は、『校議』が 2 つの異なる宋本の情報を書いており、一方は孫本・王本に符合し、もう一方は額本にしか一致しないことを言う。

	巻	親字	『校議』が記す「宋本」の情報	淮	毛	孫	王	額	『校議』に符合するもの
1	01a	下	(毛本の説解「篆文下」に対し)宋本作篆文丅	下	下	丅	丅	下	(孫,王)
2	01a	福	祜也宋本作祐也	祜	祜	祐	祐	祜	(孫,王)

3	01b	毒	(毛本の嵒に対し)宋本篆作 ()誤	毒	毒	毒	毒	毒	(孫,王)
4	01b	熏	熏象也宋本作熏黑也誤	象	象	黑	黑	象	(孫,王)
5	01b	蘇	榦不體宋本作榦	榦	榦	榦	榦	榦	(孫,額)
6	01b	蔑	(毛本の牂蘘に対し)宋本及…作牂蔑	蘘	蘘	蔑	蔑	蘘	(孫,王)
7	01b	黄	(毛本の兔瓜に対し)宋本作兔苽也	兔瓜	兔瓜	兎苽	兎苽	兔瓜	(無)
8	02b	遽	(毛本について)篆體誤宋本作  ()	遽	遽	遽	遽	遽	(孫)
9	02b	徫	宋本及…作  ()	徫	徫	徫	徫	徫	(孫,王)
10	02b	躔	(毛本の篆體が厂に従うのに対し)篆體當從广宋本不誤	躔	躔	躔	躔	躔	(孫,王)
11	03a	譯	(毛本の説解中の譯に対し)宋本説解譯作譯屢作屖	譯…屢	譯…屢	譯…屖	譯…屢	譯…屢	(孫)
12	03a	訇	西域誤宋本作西城	域	域	城	城	域	(孫,王)
13	03a	讒	宋本篆作 ()此從二龟誤	讒	讒	讒	讒	讒	(孫)
14	03a	訛	(毛本の慰也に対し)宋本作尉也誤	慰	慰	尉	尉	慰	(孫,王)
15	03b	殺	殺改之改當從巳宋本不誤(実際には未改本は巳に従うように見える)	改	改	改	改	改	(孫,王)
16	04a	鬷	宋本篆作 ()此從反 ()誤	鬷	鬷	鬷	鬷	鬷	(孫,王)
17	04a	鵑	(毛本の暝鵑也に対し)説文無暝字宋本及…作瞑	暝	暝	瞑	瞑	暝	(孫,王)
18	04b	殲	據説解贏聲則篆體當作 ()[13]	殲	殲	殲	殲	殲	(孫,王)
19	04b	劖	宋本篆作 ()此從二龟誤	劖	劖	劖	劖	劖	(孫,王)
20	05a	畀・卑	(毛本の由聲に対し)當作由聲宋本不誤	由	由	由	由	由	(孫,王)
21	06a	枚	榦不體宋本作榦	榦	榦	榦	榦	榦	(孫,額)
22	06a	尿	箋不體宋本作箋	箋	箋	箋	箋	箋	(孫)
23	06b	鄒	宋本篆作鄒此從二龟誤	鄒	鄒	鄒	鄒	鄒	(孫)
24	06b	鄾	()聲不成字宋本作臺聲	臺	臺	臺	臺	臺	(孫,王)
25	07b	穾	(毛本の篆体  に対し)宋本篆作穾此從宀誤	穾	穾	穾	穾	穾	(孫,王)
26	07b	痙	宋本篆作痙此脱一畫	痙	痙	痙	痙	痙	(孫,王)
27	07b	曰	宋本作讀若艸莓莓脱之字	之	之	(欠)	(欠)	之	(孫,王)
28	07b	戟	(毛本の獃に対し)宋本篆作敏此從犬誤	獃	獃	獃	獃	獃	(孫)
29	08a	毖	(毛本の于郵に対し)説文無郵字宋本作卹	郵	郵	卹	卹	郵	(孫,王)
30	08b	鰥・獸	昆于宋本作昆干[14]	干	干	干	干	于	(孫,王)
31	08b	歈	(毛本の篆体の歈に対し)宋本篆體作欥誤	歈	歈	歈	歈	歈	(孫,王)
32	09b	彖	宋本作彖…重出毛本改作彖依小徐也	彖	彖	彖	彖	彖	(孫,王)
33	09b	彖	宋本作希…毛本改作彖亦即希字也皆重出	彖	彖	彖	彖	彖	(孫,王)
34	10a	驕	(毛本の我馬唯維に対し)宋本及…作我馬唯驕	維	維	唯	唯	維	(孫,王)

[13] この「當作」に相当する字形について宋本を引かない。従って額本のような状況は見ていないと思われる。
[14] 額本以外は判断が困難である。

35	10a	𠬝	籀文一宋本作篆文	籀	籀	篆	篆	籀	(額),(孫,王)
36	10a	爨	(爨)宋本篆体作(爨)此脱一畫	爨	爨	爨	爨	爨	(孫,王)
37	10a	熇	熱不體宋本作熱	熱	熱	熱	熱	熱	(孫,王)
38	10b	𤇾	…宋本篆體作𤇾	𤇾	𤇾	𤇾	𤇾	𤇾	(孫,王)
39	11a	重 63	宋本三作二按當作四	62	63	62	62	63	(孫,王)
40	11a	滅	(毛本の篆體滅に対し)宋本作□氵□或火誤	滅	滅	滅	滅	滅	(孫,王)
41	11a	瀍	(通行本の入灞に対し)説文無灞字宋本作霸	霸	灞	霸	霸	灞	(孫,王)
42	11a	潭	宋本及…作玉山…此作王山誤	王山東入	王山東入	玉山東入	王山東	王山東入	(孫)
43	11a	沛・沛	宋本汙作汗	汗	汗	汗	汗	汗	(孫)
44	11a	沙	从辵誤宋本作从尜	辵	辵	尜	辵	辵	(孫)
45	12a	搦	(搦)篆體當作(搦)宋本不誤	搦	搦	搦	搦	搦	(孫)
46	12b	婉	宋本説解中婉寃字皆從冂此從宀誤	□女寃…寃	□女寃…寃	婉…寃	寃…婉	□女寃…寃	(孫)
47	12b	乚	宋本作从反丿此作乚誤	乚	乚	丿	丨	乚	(孫)
48	13a	級	第字宋本同一宋本作弟	第	第	弟	弟	第	(額),(孫,王)
49	13a	杚	(毛本の杚に対し)宋本作□木夸	杚	杚	杚	杚	杚	(孫)
50	13a	絮	宋本及…作一曰敝絮此作一曰敝絮誤	絮	絮	絮	絮	絮	(孫)
51	13a	蠖	(蠖)宋本作(蠖)[15]	蠖	蠖	蠖	蠖	蠖	(孫,王)
52	13a	蜡	骴不體宋本作骴	骴	骴	骴	骴	骴	(孫)
53	13a	螫	(螫)篆體誤宋本作(螫)	螫	螫	螫	螫	螫	(孫,額)
54	14a	軋	宋本作軘也(毛本の轘也に対し)説文無轘字	軘	軘	軘	軘	軘	(孫,額)
55	14a	軘	(通行本の篆體は反に從い反聲にするところ)宋本同一宋本篆作□車□卩叉説解作反聲	軘	軘	軘	軘	軘	(孫,王)
56	14a	軘	…一本篆與説解皆從反	皮	反	反	反	反	(孫,王),(額)
57	14b	陣	(毛本の篆體□に対し)宋本作□	□	□	□	□	□	(孫,王)
58	14b	韝	(毛本の篆體□□に対し)宋本作□□此誤	□	□	□	□	□	(孫)
59	14b	醹	宋本作惟毛本…作維	維	維	惟	惟	維	(孫,王)
60	14b	醽	(醽)宋本篆作(醽)	醽	醽	醽	醽	醽	(孫,王)
61	15a	鼓	宋本及…作鼓從叟此從支誤	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	(孫,王)

[15] 『校議』が問題にしている点が明らかでないが、「中」の字形差と思われる。

ⓒ 2017 Information Processing Society of Japan